

「徐霞客遊記」訳注稿

卷二下 楚遊日記

*崇禎一〇（一六三七）年正月十一日～閏四月七日、一一五日間 徐霞客五十二歳

楚遊日記（3）

●崇禎一〇（一六三七）年三月一日～二十日、二〇日間 徐霞客五十二歳

凡例

- ・ ■ 本文の部では、一定の日ごとに区切り、本文を掲げ、●校勘を施す。
- ・ ■ 訳注の部では、一定の日ごとに区切り、さらに内容上のまとまりでも区切り、●訓訳、●語注、●口語訳の順で記す。
- ・ 本文は、褚紹唐・吳王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年（「上海新整理本」と略）とする。
- ・ 本文について、底本である季本ではなく、乾隆刊本にある部分、季本より、乾隆本が詳しい部分に「」で示されている。
- ・ 訳注では、「」を外し、そのまま本文に組み込んで訳す。
- ・ 徐霞客の自注は「」で示す。

参照文献等（「」は略称）

◇ 訳注には諸書を参照する。

- ・ 朱惠栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年（「朱惠栄」）
- ・ 黄珅訳注『新譯徐霞客遊記』三民書局、二〇〇二年（「黄珅」）

◇ 参考文献

- ・ 『大明一統志』天順五年（一四六一）
卷之六十三長沙府、卷之六十四衡州府、卷之六十五永州府、卷之六十六郴州府
- ・ 李元度撰『重修 南嶽志』光緒九年（一八八三）（「南嶽志」）
- ・ 王開運等修『（湖南）清泉縣志』同治八年（一八六九）（「清泉県志」）
- ・ 彭玉麟等修『（湖南）衡陽縣志』同治十三年（一八七四）（「衡陽県志」）
- ・ 蔣鎮『九嶷山志』万曆四十八年（一六二〇）（『九嶷山志兩種・炎陵志』二〇〇八、所収）（「九嶷山志」）
- ・ 『中華人民共和國地名詞典 湖南省』一九九二年（「地名湖南」）
- ・ 譚民政著『陪徐霞客游湖南』湖南文芸出版社、二〇一七年（「譚民政」）
- ・ 楚遊日記における徐霞客の足跡を追って現況を報告するもの。写真多数。
- ・ 任国瑞・謝武経著『湖南的明朝與當代——徐霞客《楚遊日記》考察記』方志出版社、二〇一八年（「任国瑞」）

楚遊日記における徐霞客の足跡を追って現況を報告するとともに、楚遊日記の校注と

口語訳を行ったもの。校注と口語訳は、ほぼ朱恵栄を踏襲する。写真多数。

◇参考地図

○徐霞客地図

- ・丁文江撰『徐霞客遊記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年（「丁本付図」）
- ・褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地圖出版社、一九九一年（「路線図」）

○外邦図（陸軍参謀本部陸地測量部製作）

- ・「長沙」五十万分一（「長沙」図）
- ・「衡州」五十万分一（「衡州」図）
- ・「桂林」五十万分一（「桂林」図）
- ・「南灣」五十万分一（「南灣」図）
- ・「草市」五十万分一（「草市」図）
- ・「衡山県」五十万分一（「衡山県」図）
- ・「呉集」五十万分一（「呉集」図）
- ・「南嶽市」五十万分一（「南嶽志」図）
- ・「白果市」五十万分一（「白果市」図）
- ・「樟木市」五十万分一（「樟木市」図）
- ・「衡陽城」五十万分一（「衡陽城」図）

○現代地図

- ・湖南省地図集編纂委員会『湖南省地図集』湖南地図出版社、二〇〇〇年（「大地図」）
- ・中国地図出版社『湖南省地図冊』中国地図出版社、二〇〇一年（「小地図1」）
- ・湖南地図出版社『湖南省地図冊』湖南省地図出版社、二〇〇八年（「小地図2」）
- ・「永州旅遊交通図」湖南地図出版社、二〇一二年（「永州」図）

● 訳注稿

「三月一日〜三日」

《概要》三月三日まで。もっぱら金策で、金祥甫があたった頼母子講から二十金を借りることになる。また王府の属官たちからの借り入れもめどが立つが、静聞がしばらくそれに対応しなければならぬ。そこで静聞を衡陽に残して資金の算段を担わせ、その間霞客自身は、湖南南部の遊歴を行うこととする。それを終えて、衡陽に戻ってきてから、静聞とともに西遊に行くことにする。

■ 本文の部

三月初一日

桂王臨朝、命承奉劉及王承奉之姪設齋桃花冲施僧。静聞往投齋、晤王承奉之姪、始知前投揭議助之意、内司不爽。蓋此助非余本意、今既得金物、更少貸於劉、便可西去。静聞見王意如此、不能無望。余乃議先往道州、遊九疑、留静聞候助於此、余仍還後與同去、庶彼得坐俟、余得行遊、爲兩便云。

初二日

乃促得金祥甫銀、仍封置金寓、以少資隨身。劉許爲轉借、期以今日、復不能得。予往別、且坐候之、遂不及下舟。

初三日

早出柴埠門登舟。劉明宇先以錢二千並絹布付静聞、更以糕果追予於南關外。時余舟尚泊柴埠未解維、劉沿流還覓、始與余遇、復訂期而別。是日風雨復作、舟子遷延、晚移南門埠而泊。

■ 訳注の部

● 訓訳

三月初一日

桂王朝に臨み、承奉劉及び王承奉の姪に命じて、齋を桃花冲に設けて僧に施す。静聞往きて齋に投じ、王承奉の姪に晤ひ、始めて、前の掲を投じて助くるを議するの意、内司は爽はざるを知る。蓋し此の助は余の本意に非ざるも、今既に金の物を得、更に少しく劉に貸らば、便ち西に去るべし。静聞王の意の此くの如きを見、望み無きこと能わず。余乃ち議す、先に道州に往きて、九疑に遊び、静聞を留めて此に助を候たしむ。余は仍りて還りて後に與に同に去らん、と。彼は坐して俟つを得、余は行きて遊ぶを得、兩便たるに庶しと云ふ。

初二日

乃ち金祥甫の銀を促し得、仍りて封じて金の寓に置き、少資を以て身に随ふ。劉はために轉借するを許し、期するに今日を以てするも、復た得る能わず。予往きて別れんとし、

且く坐して之を候ち、遂に舟に下るに及ばず。

初三日

早に柴埠門を出でて舟に登る。劉明宇先に錢二千并びに絹布を以て靜聞に付し、更に糕果を以て予を南關の外に追ふ。時に余が舟は尚ほ柴埠に泊して未だ維を解かず、劉は流れに沿ひて還りて覓め、始めて余と遇ふ。復た期を訂して別る。

是の日、風雨復た作り、舟子遷延し、晩に南門埠に移りて泊す。

●語注

○桂王 朱常瀛。万曆二十五（一五九七）年から隆元元（二六四五）年。神宗の第七子で、天啓七（一六二七）年に藩王となり、封地の湖南衡陽に就藩した。のち崇禎十六（一六四三）年に張獻忠が衡州府を落とすと、南へ逃げ、隆元元年に梧州で病死した。

○承奉 命令を受けて実行する。黄珣らは、官職の一種と解している。いまこれに従う。

○此助 この内容がいまひとつ理解が行っていない。二月十六日条で、靜聞が僧田のことで資金を手に入れようと言っていることと、関連があるのか。

○道州 永州府南部の県。いま道県。

○九疑 九疑山。

○轉借 またがし。

○期以今日 金を貸しに来てくれる期限を今日としていた、と解した。

○復不能得 劉明宇がやってこなかった、と解した。

○下舟 舟を出発させる。

○糕果 糕は、こなもち。糕果で蒸し菓子。

○柴埠 埠は、船着き場。「清泉県志」では、賓日門渡。

○訂期 再会する約束を結ぶ。

●口語訳

《1》衡陽で旅行資金の算段。靜聞を衡陽に残し、自らは湖南南部の遊歴へ

「三月初一日」

桂王が朝議に臨席し、劉承奉と、王承奉の甥に命じて、桃花冲で御齋を設けて僧侶に施すこととなった。靜聞も行つて御齋に参加し、王承奉の甥に会つて、そこで始めて、以前、金祥甫が揭示板に出して、霞客を補助することを議論したことについて、王府の属官たちは約束を違えたわけではなかったことが、分かった。

思うに、こうした補助は私の本意ではなかったのだが、今や金祥甫からも金を借り、さらに少しばかり劉明宇に借りることができれば、それで西遊の旅ができる。靜聞は王承奉のこうした意見を聞いて、望みがつながつたと思ったのだ。

そこで私たちは話し合い、私は先に道州を経由して九疑山に行つて遊行し、靜聞はここに留まつて援助資金が調うのを待つこととした。そして私が衡陽に戻つてきてから、一緒に西遊に旅立つこととする。靜聞は衡陽で待つことができ、私は九疑山などへ遊行することができ。靜聞は待つことができ、私は行つて遊ぶことができるという、両者ともに望むがままに近いということになった。

〔初二日〕

金祥甫からの借銀を得て、封をして彼の寓居で保管しておいてもらい、（湖南遊に必要な）少しばかりの資金だけを身につける。劉明宇が私のためにお金を又借りしてくれることになっており、今日を期限としていたが、彼は現れなかった。そこで私は劉明宇の所に別れを告げに行き、しばらく座して彼を待っていたため、この日は結局、乗船できなかった。

〔初三日〕

早朝、柴埠門から城外へ出て、船着き場で舟に乗る。（そのころ）劉明宇は、先ず錢二千と絹布を静聞に与え、その後、蒸し菓子を持って私を南関の外まで追いかけていた。しかしその時、私の乗った船はまだ柴埠に停泊していて、とも綱を解いていなかった。劉明宇は、湘江の流れに沿って引き返して私を捜し求め、やっと柴埠で出会えた。さらに再会を期して別れた。

この日、風雨がまた起こってきたので、船頭は出港時間を延期し、夜に南門の船着き場へ移動するのみで、そこに停泊した。

〔三月四日～七日〕

《概要》三月四日から本格的な船旅が始まる。川幅が広い湘江をゆったりと遡上してゆく。難に遇い、艾行可が命を落とした所も通過すれば、災難の記憶も遠いものとなる。兩岸の山並みも険しいものではなく、穏やかで順調な行程である。

■本文の部

初四日

平明行、風暫止、夙雨霏霏。下午過汧江、抵雲集潭、去予昔日被難處不遠、而雲集則艾行可沈汨之所也。風雨淒其、光景頓別、欲爲《楚辭》招之、黯不成聲。是晚泊於雲集潭之西岸、共行六十餘里。

初五日

雷雨大至。平明發舟、而風頗利。十里、過前日畏途、沈舟猶在也。四里、過香爐山、其上有灘頗高。又二十五里、午過桂陽河口、桂陽河自南岸入湘。〔春水出道州舂陵山、歸水出寧遠九疑山、經桂陽西境、合流至此入湘、爲常寧縣界。由河口入、抵桂陽尚三百里。〕又七里、北岸有聚落名松北。又四里、泊於瓦洲夾。共行五十里。

初六日

昧爽行、雨止風息。二十里、過白坊驛、聚落在江之西岸、至此已入常寧縣界矣。又西南三十里、爲常寧水口、其水從東岸入湘、亦如桂陽之口、而其水較小、蓋常寧縣治猶在江之東南也。又西十五里、泊於糧船埠、有數家在東岸、不成村落。是日共行六十五里。

初七日

西南行十五里、河洲驛。日色影現、山崗開伏。蓋自衡陽來、湘江兩岸雖崗陀繚繞、而雲母之外、尚無崇山傑嶂。至此地、湘之東岸爲常寧界、湘江西岸爲永之祁陽界、皆平陵擴然、崗阜遠疊也。又三十里、過大鋪、於是兩岸俱祁陽屬矣。上九州灘、又三十里、泊歸陽驛。

■訳注の部

●訓訳

初四日

平明に行く。風暫く止むも、夙雨霏霏たり。

下午、汨江を過ぎ、雲集潭に抵る。予の昔日に難を被むる處を去ること遠からずして、雲集は則ち艾行可の汨に沈むの所なり。風雨凄其として、光景頓に別る。《楚辭》を爲して之を招かんとす。黯にして聲を成さず。

是の晩、雲集潭の西岸に泊す、共に行くこと六十餘里なり。

初五日

雷雨大いに至る。

平明に舟を發す。而して風頗る利あり。十里にして、前日の畏途を過ぐ。沈舟猶ほ在り。四里にして、香爐山を過ぐ。其の上に灘の頗る高き有り。又た二十五里にして、午に桂陽河の口を過ぐ。桂陽河南岸より湘に入る。「春水は道州の舂陵山に出で、歸水は寧遠の九疑山を出で、桂陽の西境を経て、合流して此に至りて湘に入る。常寧縣の界たり。河口より入るに、桂陽に抵るには尚ほ三百里あり。」又た七里にして、北岸に聚落有り、名は松北なり。又た四里にして、瓦洲夾に泊す。共に行くこと五十里なり。

初六日

味爽行く。雨止み風息む。

二十里にして、白坊驛を過ぐ。聚落江の西岸に在り。此に至りて已に常寧縣の界に入る。又た西南に三十里にして、常寧水の口たり。其の水は東岸より湘に入る。亦た桂陽の口の如くして、而して其の水は較々小なり。蓋し常寧縣治は猶ほ江の東南に在るなり。又た西に十五里にして、粮船埠に泊す。數家東岸に在る有り。村落を成さず。

是の日、共に行くこと六十五里なり。

初七日

西南に行くこと十五里にして、河洲驛なり。日色影現し、山崗開伏す。蓋し衡陽より來、湘江の兩岸は崗の陀として繚繞たりと雖も、雲母の外は、尚ほ崇山の傑嶂たるは無し。此の地に至れば、湘の東岸は常寧の界たり、湘江の西岸は永の祁陽の界たり、皆な平陵擴然として、崗阜遠く疊なる。又た三十里にして、大鋪を過ぐ。是に於いて兩岸俱に祁陽の屬なり。九州灘を上る。又た三十里にして、歸陽驛に泊す。

●語注

○夙 ずっと以前からの。宿。

○沈汨 汨羅江は、屈原が身を投じたところ。艾行可が水死したことを言う。

○凄其 心情表現で、淒涼悲傷（孤独で寂しく悲嘆に暮れる）。あるいは、物理的に寒涼。
○別 任国瑞らが「変化する」と訳すのに従う。

○《楚辭》招之 「楚辭」招魂篇は、宋玉が屈原の魂を呼ぶ作品。

○黯 気持ちがあふさぐさま。

○畏途 畏途とも。危険で恐るべき道、また場所。

○其上灘頗高 其（山）の上とは、上流。灘は、早瀬。高いとは、浅く流れが急なことを表すだろう。

○桂陽河 舂陵水のこと。

○經桂陽西境、合流至此入湘 実際には、舂水と歸水是永州域で合流し、そのあと東に流れて桂陽県の西境に入って北流する。しかし、このままで訳す。桂陽は、明代は衡州府に属する県級の州。

○常寧縣 衡州府に属する県。

○松北 黄珣らは、西遊の途上の四月二十一日条の「松柏」を湘江南岸常寧県域の今の松柏鎮とし、ここに「北岸の聚落」として「松北」とあるのは「松柏」の誤りであろうとしている。しかし、「地名湖南」によれば、湘江北岸の衡南県域に「松柏」という聚落があり、湘江を挟んだ南岸の常寧県域に「松柏鎮」があるとする。そして伝承として、「湘江の兩岸に一松一柏があつた」ことから、対岸にある聚落や街を同じ名前の「松柏」としたという。つまり四月二十一日条の湘江南岸の「松柏」とここにいる湘江北岸の「松北」とは別の地名ということになる。「松北」のままでよい。なお、大小地図によれば、北岸の「松柏」は「松江鎮」と名を変えている。ここから粮船埠（今の粮市鎮）までは、湘水の北岸が衡陽県で、南岸が常寧県である。

○白坊驛 今の柏坊鎮。湘江南岸の常寧県域にある。

○常寧水 南の常寧県治から北上し、ここで湘江に注ぐ。河口には、「桂林」図では、江口塘、現代地図では、江河という町の記載がある。

○粮船埠 今の粮市鎮。湘江の北岸の永州府祁陽県域（今、衡陽市。祁東県）。

○河洲驛 諸注は、「今の河州鎮」とするが、河州鎮は、湘江北岸で、祁陽県に属する。

河州鎮の対岸の湘江南岸にあるのは常寧県に属する新河鎮である。

○日色 太陽の光。

○影 影影は、隠隠に同じ。曖昧模糊とした様。

○開伏 黄珣は「開豁低伏」と訳す。

○崗陀 熟語はない。陀は陂陀で、斜めに傾いている様。

○繚繞 まがりくねる、まわりつく。

○大鋪 今の太堡。湘江南岸。

○歸陽驛 今の帰陽。湘江北岸。

●口語訳

《2》衡陽から祁陽へ

〔四日〕

黎明に出発する。風はしばらく止んでいるが、前夜からの雨は、しきりに降り続けている。

午後、汭江（車江）を過ぎ、雲集潭に至った。私が先日、困難を被ったところからそれほど遠くないし、雲集潭は、艾行可が汭羅に沈んだ（水死した）所である。風雨が寒く冷たく、孤独で寂しげで悲嘆に暮れた様をなして来て、光景はすぐに変化した。《楚辭》を想起して艾行可の魂を招こうとしたが、気持ちが塞いでしまい、声に出すことができなかった。

この晩は、雲集潭の西岸に停泊する。今日一日で六十里あまり進んだ。

〔五日〕

雷雨が大いに至る。

黎明に舟が出る。風の利をとでも得てどんどん進む。十里で、先日の危険で恐ろしい場所を通り過ぎる。沈没船がまだある。四里で、香爐山の裾を通過する。この上流には、とても浅く流れが急な浅瀬がある。さらに又た二十五里で、正午に桂陽河の河口を通過する。桂陽河は湘江に南岸から入っている。舂陵水は、道州の舂陵山を源とし、歸水是寧遠の九疑山を源としており、桂陽県の西境を北に流れ、合流して（舂陵水＝桂陽河となり）この地点で湘江に入る。ここは常寧県の境域である。この河口から入って桂陽に至るには、なお三百里ある。さらに又た七里で、北岸に聚落がある。名は松北という。さらに又た四里で、瓦洲夾に停泊する。

本日の行程は全てで五十里であつた。

〔六日〕

払暁に出発する。雨は止み、風も息む。

二十里で、白坊駅を過ぎる。聚落が川の西岸にある。ここから常寧県域に入る。さらに又た西南に三十里で、常寧水の河口である。東岸から湘水に注いでいる。昨日通った桂陽河の河口と似ているが、水量はこちらの方がやや少ない。思うに、常寧県の治所は、ここから東南に位置するのだろう。さらに又た西に十五里で、粮船埠に停泊する。数軒の家屋が東岸にあるのが確認できるが、村落を形成するほどではない。

この日の行程は全てで六十五里であつた。

〔七日〕

西南に行くこと十五里で、河洲駅である。太陽が薄ぼんやりと姿を現し、山丘が低く開けている。思うに、衡陽よりこのかた、湘江の両岸は斜めに傾くならかな岡が連綿とまがりくねって続いてはいるが、雲母山の外は、高い山や突出した山並みはなかった。そしてここに至ると、湘江の東岸は常寧県の境域で、湘江の西岸は永州祁陽県の境域であるが、どちらを向いても、平らな丘陵地が広々と広がっていて、山並みは遙か遠くで重なりあっている。

さらに又た三十里で、大鋪を過ぎる。ここに至ると両岸ともに祁陽県である。九州灘を遡及する。

また三十里で、帰陽駅で宿泊する。

〔三月八日～九日〕

《概要》好事魔多し。のんびりと船旅を楽しんでいたのに、発病してしまう。徐霞客は元

来健康で頑強な人で、病気や怪我の場面は極めて少ない。このころは、衡陽での遭難、旅行資金の算段と、本来の遊歴とは異なる点での苦労の連続であった。そこを無理して旅に出たため、さすがの霞客の身体も悲鳴をあげたのであろう。

それでも山や川に関する記述をやめずに続けている。九日の午後には、有名な浯溪のある祁陽に到着したが、とうてい上陸して観察ができる体調ではなく、断念して、船で休む。八日条に欠文がある。

■本文の部

初八日

飯後余驟疾、呻吟不已。六十里、至白水驛。初擬登訪戴宇完、謝其遇劫時解衣救凍之惠、至是竟不能登。是晚、舟人乘風順、又暮行十五里、泊於石壩裡、蓋白水之上流也。是日共行七十五里。「按《志》、白水山在祁陽東南二百餘里、山下有泉如白練。」「缺」去祁陽九十餘里、又在東北、是耶非耶？」

初九日

味爽、舟人放舟、余病猶甚。五十餘里、下午抵祁陽、遂泊焉、而余不能登。先隔晚將至白水驛、余力疾起望西天、橫山如列屏、至是舟溯流而西、又轉而北、已出是山之陽矣、蓋即祁山也。山在湘江北、縣在湘江西南、祁水南、相距十五里。其上流則湘自南來、循城東、抵山南轉、縣治實在山陽・水西。而縣東臨江之市頗盛、南北連峙、而西向入城尚一里。其城北則祁水西自邵陽來、東入於湘、遂同曲而東南去。

●校勘

* 1 西南 祁陽の町は湘江の北岸にある。朱惠榮らは、乾隆本等にならい「西南」の「南」を衍字とする。これに従い、訳注では「西」とする。

■訳注の部

●訓訳

初八日

飯後、余驟かに疾む、呻吟して已まず。

六十里にして、白水驛に至る。初めは登して戴宇完を訪ね、其の劫に遇ひし時に衣を解きて凍えを救ふの恵みに謝せんと擬するも、是に至りては竟に登する能わず。是の晚、舟人風に乗じて順にして、又た暮れに行くこと十五里にして、石壩裡に泊す。蓋し白水の上流なり。

是の日、共に行くこと七十五里なり。「《志》を按ずるに、白水山は祁陽の東南二百餘里に在り。山下に泉有り、白練の如し。」「缺」祁陽を去ること九十餘里なり、又た東北に在り、是か非か。」

初九日

味爽、舟人舟を放つ、余が病ひ猶ほ甚し。五十餘里にして、下午に祁陽に抵る、遂に焉に泊す。而して余は登る能わず。先隔晚に將に白水驛に至らんとするに、余疾ひを力めて起ちて西天を望む。横山列屏の如し。是に至りて舟は流れを溯りて西し、又た轉じて北し、

已に是の山の陽に出づ。蓋し即ち祁山なり。山は湘江の北に在り、縣は湘江の西、祁水の南に在り。相ひ距たること十五里なり。其の上流は則ち湘南より來り、城の東に循ひて、山に抵りて南轉す。縣治は實に山の陽、水の西に在り。而して縣東の臨江の市は頗る盛にして、南北連峙す、而して西に向ひて城に入るには尚ほ一里あり。其の城北は則ち祁水の西のかた邵陽より來り、東して湘に入り、遂に同曲にして東南に去る。

●語注

○疾 食あたりか。しかし同じものを食べたと思われる顧僕などはどうもないようだ。さすがに頑強な身体を持った霞客だが、疲れがでたのであろうか。

○白水驛 今の白水市。湘江南岸。祁陽県に属す。

○戴宇完 一月十二日条に、遭難して凍えている霞客を見て、隣の船の乗客であつた戴なる者が衣服を譲ってくれたという記事がある。

○石壩裏 石壩が、小地図1・2に見える。

○蓋白水之上流也 この記述意味不詳。湘江沿いなのに「白水上流」とはどういうことであらうか。

○祁山 「大明一統志」卷六五永州府山川に「祁山」在祁陽縣北一十五里。遠望如城壁。

○祁水 「大明一統志」卷六五永州府山川に「祁水」在祁陽縣治北。源出寶慶府邵陽縣

○邵陽 寶慶府の府治。今の邵陽市。

●口語訳

「八日」

朝食後、突然具合が悪くなった。うめき声が出て止まらない。

六十里で、白水駅に至る。実は、ここで上陸して戴宇完を訪ね、強盗に襲われて身ぐるみはがれた時に、自らの衣服を解いて私に与えてくれて、凍えるのを救ってくれたことへの感謝の意を表しようと思っていた。しかし、病を得てしまつてはどうしようもない。

この晩、船頭は、風向きがよいのに乗じて順調に進み、暮れてからも十五里進み、石壩裡に停泊した。思うに、白水の上流であらう。

是の日、共に行くこと七十五里なり。「大明一統志」には「白水山は祁陽県の東南二百余里にある。山の麓に泉があつて、その水は白練のように美しく澄んでいる」とある。「缺文」祁陽から九十余里で、東北に位置する。どちらが正しいのだろうか。」

「九日」

払曉に、船頭は船を走らせた。私の病は、まだ厳しいものがある。

五十里あまりで、午後に祁陽県に至つた。ここで停泊することになった。しかし私はといえ、寝床から起きて上陸する力はない。

昨晚、白水駅に至る頃おい、私は病をおして起き、西の空を眺めた。そこには屏風のよう山並みが立ち並んでいた。その後、この地祁陽に至るまでに、船は流れを遡及して西に進み、また北に轉じて、見えていた山並みの南に出た。この山こそ祁山である。

祁山は湘江の北、祁陽県は湘江の西、祁水の南にあたる。山と県城とは十五里ほどの距離である。上流はといえ、湘江が南から流れてきて、祁陽城の東側に沿つて、祁山に突き当たつてから南に轉じる。県治は実は祁山の南、湘江の西にあたる。そして県城東部の

湘江に面した市場はたいそう賑わっており、南北につながっている。そして湘江から県城に入るには一里ほどである。県城の北は、祁水が西の方の邵陽方面から流れてきており、県城の東を通って、湘江に合流する。そして一緒になって東南へと流れ去る。

「三月十日」

《概要》 浯溪訪問の思いを振り切ることができず、舟が暫く出ないというので、無理をおして上陸し、浯溪を探索する。元結の碑文など主な物は観察できたが、拓本を取ることができないことに、いらだちと無念を感じている。浯溪で待っていると、正午ごろに舟がやって来たので乗船した。浯溪に行っているの、そこで拾ってもらうことを約束していたのだろう。訳者は、二〇一四年十二月二十七日に浯溪を訪問した。浯溪自身は、霞客が言う如く、ほんの小さな溝のような溪流であったが、「大唐中興頌」の石刻は雄大で迫力があるものであった。

■本文の部

初十日

余念浯溪之勝、不可不一登、病亦稍差、而舟人以候客未發、乃力疾起。沿江市而南、五里、渡江而東、已在浯溪下矣。第所謂獅子揪者、在縣南濱江二里、乃所經行地、而問之、已不可得。豈沙積流移、石亦不免滄桑耶？浯溪由東而西入於湘、其流甚細。溪北三崖駢峙、西臨湘江、而中崖最高、顏魯公所書《中興頌》高鑄崖壁、其側則石鏡嵌焉。石長二尺、闊尺五、一面光黑如漆、以水噴之、近而崖邊亭石、遠而隔江村樹、歷歷俱照徹其間。不知從何處來、從何時置、此豈亦元次山所遺、遂與顏書媲美耶！宋陳衍云：「元氏始命之意、因水以爲浯溪、因山以爲嵒山、作室以爲唐亭、三吾之稱、我所自也。製字從水・從山・從廣、我所命也。三者之目、皆自吾焉、我所擅而有也。」崖前有亭、下臨湘水、崖巔石巉簇〔立〕、如芙蓉叢蓊。其北亦有亭焉、今置伏魔大帝像。崖之東麓爲元顏祠、祠空而隘。前有室三楹、爲駐遊之所、而無守者。越浯溪而東、有寺北向、是爲中宮寺、即漫宅舊址也、傾頽已甚、不勝弔古之感。時余病怯行、臥崖邊石上、待舟久之、恨磨崖碑拓架未徹而無拓者、爲之悵悵！既午舟至、又行二十里、過媳婦娘塘、江北岸有石娉婷立巖端、矯首作西望狀。其下有魚曰竹魚、小而甚肥、八九月重一二斤、他處所無也。時余臥病艙中、與媳婦覲面而過。又十里、泊舟滴水崖而後知之、矯首東望、已隔江雲幾曲矣。滴水崖在江南岸、危巖互空、江流寂然、荒村無幾、不知舟人何以泊此？是日共行三十五里。

●校勘

* 1 唐 定本作唐。校勘記で、「元次山集唐亭銘」により唐に改めている。

■訳注の部

●訓訳

初十日

余浯溪の勝を念ひ、一たび登せざるべからず。病も亦た少々差ゆ。而して舟人客を候つを以て未だ發せず。乃ち疾を力めて起く。

江市に沿ひて南す。五里にして、江を渡りて東す。已に浯溪の下に在り。

第だ所謂る「獅子袱」なる者は、縣南の濱江二里に在り、乃ち經行する所の地なりて、之を問ふに、已に得べからず。豈に沙積み流れ移り、石も亦た滄桑を免れざるか。

浯溪は東よりして西して湘に入る。其の流れは甚だ細し。溪の北は三崖駢峙し、西のかた湘江に臨む。而して中崖最も高し。顏魯公書する所の《中興頌》高く崖壁に鏤せらる。其の側には則ち石鏡嵌めり。石は長さ二尺、闊さ尺五。一面光黒として漆の如し。水を以て之に噴す。近くして崖邊の亭石、遠くして江を隔つるの村樹、歴歴として俱に其の間に照徹せらる。知らず、何れの處より來り、何れの時より置かるるを。此れ豈に亦た元次山の遺す所か。遂に顏の書と、勝ちを媲せんか。

宋の陳衍云ふ「元氏始めて命ずるの意は、水に因りて以て浯溪と爲し、山に因りて以て嵒山と爲し、室を作りて以て唐亭と爲す。三吾の稱、我の自らする所なり。字を製するに、水に従ひ、山に従ひ、广に従ふは、我の命ずる所なり。三者の目、皆な「吾」よりするは、我の擅にする所なり」と。

崖の前に亭有り、下は湘水に臨む。崖の巔に石巉簇立すること、芙蓉の叢萼の如し。其の北にも亦た亭有り。今は伏魔大帝像を置く。崖の東麓は元顏祠たり。祠は空にして隘し。前に室三楹有り、駐遊の所たり、而して守る者無し。

浯溪を越えて東すれば、寺の北に向く有り。是れ中宮寺たり。即ち漫宅の舊址なり。傾頽すること已に甚し。古を弔ふの感に勝へず。

時に余は病みて行を怯え、崖邊の石上に臥し、舟を待つころ之を久しくす。恨むらくは、磨崖碑の掲架未だ徹せざるに拓する者無きを。之がため悵悵たり。

既に午にして、舟至る。

又た行くこと二十里にして、媳婦娘塘を過ぐ。江の北岸に石娉婷の巖端に立つ有り。嬌首して西望するの状を作す。其の下に魚有り、竹魚と曰ふ。小にして甚だ肥ゆ。八九月にして重さ一二斤となる。他處に無き所なり。

時に余病に艙中に臥し、媳婦と覲面して過ぐ。又た十里にして、舟を滴水崖に泊して後に之を知る、嬌首して東に望み、已に江雲を隔てて幾たびか曲るかを。

滴水崖は江の南岸に在り。危巖互に空し、江流寂然たり。荒村幾ど無し。知らず、舟人何を以て此に泊するかを。

是の日、共に行くこと三十五里。

●語注

○浯溪 「大明一統志」卷六五永州山川に「浯溪」在祁陽縣南五里、流入湘江」とあり、以下のことも記載がある。祁陽にある湘江沿いの名勝。もとは名も無き小溪だったが、唐の元結（が道州刺史に任ぜられてここを通過したとき、その勝異を愛でて、溪畔に寓居を建て、「自分だけの溪流」として浯溪と命名した。後述する「大唐中興頌」を作り、書家の顔真卿に揮毫を依頼して、大暦六年（七七二）に、それを崖壁に磨刻した。その後、多くの文人がここを訪れては、詩文を作り、崖に磨刻したため、碑林を形成した。碑林を含む一帯は、現在国家A四級旅遊景区、全国重点文物保护单位となっている。

○獅子袱 黄琬は、祁陽の南一里の湘江西岸にある狻猊（唐獅子）に似た形の石だという。者、在縣南濱江二里、乃所經行地、而

○問之、已不可得。その所在を問うたが、見つからなかった、ということではないか。
○滄桑 二月二十二日条既出。年月とともに移り変わる事。

○顔魯公 顔真卿（七〇九〜七八五）、字清臣。言うまでもなく唐代を（あるいは中国を）代表する書家。安史の乱で功績を立て、魯郡公に封ぜられた。「唐書」卷一五三本伝。

○《中興頌》 正式には大唐中興頌。安史の乱の収束後、唐王朝が再び興隆を迎えることを言祝いだ頌歌。撰者は元結（七二三〜七七二）、字は次山。中唐の詩人で、晩年の道州刺史が最高位。民衆の痛苦を憂えた楽府詩も多く、白居易に影響を与えた。「唐書」卷一〇石鏡 「地名湖南」には、名勝古跡として「鏡石」の記事があり、譚民政も確認している（二一〇頁）。

○嬋勝 嬋は、匹敵する。名勝ぶりとして肩を並べるくらいか。

○宋陳衍云 この文は、「大明一統志」卷六五永州山川「浯溪」の項に引用されている。

陳衍については、黄琬は宦官の陳衍だろうとしている。神宗・哲宗期のいわゆる新旧の党争の時代に力を持つが、最後は「大逆無道」として刑死した。湖南の郴州に赴任したことがあり、あるいはその折りに、浯溪を訪ね、この文を書いたものか。「宋史」卷四六八宦者列伝本伝。

○巖 けわしいさま。

○簇立 簇のように群がり立つ。

○伏魔大帝 明の万暦年間に、三国志の英雄、蜀の関羽を、伏魔大帝に任ずる詔勅が出された。

○元顔祠 「大明一統志」卷六五祠廟に「〔顔元祠〕在祁陽縣治南、浯溪上。祀顔真卿元結。鄱陽許尹記」とある。

○中宮寺 「大明一統志」卷六五寺觀に「〔中宮寺〕在祁陽縣浯溪上。即唐元結舊宅址」

○漫 漫郎。元結が自らを称した名。

○搨 磨崖碑の拓本を取る。

○徹 黄琬らに従い「撤」に通じるとした。

○悵悵 失望し無念に思ふこと。

○媳婦娘塘 黄琬は、又名新婦塘とする。譚民政はそれらしきところを特定している（二一四頁）。

○娉婷 あでやかで美しいさま。

○矯首 こうべをあげる。

○覲面 面と向き合う。

○滴水崖 今、同じ。湘江南岸。「桂林」図は、肩水岩とする。

○矯首東望、已隔江雲幾曲矣 ここもよく分らない。石が西望しており、自分は東望していた。その場所から川面にたちこめる靄を通して何度も曲がってきた、というくらいか。

○江雲 江烟に同じか。

●口語訳

《3》祁陽浯溪探索

〔十日〕

浯溪の景勝のことを考えると、一度は上陸しなければならない。病氣の方もやや回復に

向かっている。そして船頭は乗客を待つとして、舟を出発させていない。そこで病をおして起き上がる。

（祁陽のまちに上陸し）湘江に面している市場に沿って南へ進む。五里行って、湘江を渡り、東へ進む。ここはもはや浯溪の下流である。

ただ有名な「獅子揪」は、祁陽県城の南二里の湘江に面したところにあったというが、途中でその所在を問うたのだが、見つけれなかった。土砂が積み重なったり、川筋が変わったりするように、この石もどこかへ移ってしまったり、なくなったりしてしまったのだろうか。

浯溪は東から西に流れて湘江に入る。その流れはとても細い。溪流の末の北部に三つの崖が並んでおり、西に湘江に臨んでいる。その中で真ん中の崖が最も高い。顔魯公が揮毫した《中興頌》が、崖壁に高々と鐫刻されている。その側には、石の鏡が嵌めこまれている。石は長さが二尺、幅が一尺五寸。一面が黒々と光っていて漆を塗ったようである。水が吹き付けられるようになっていく。近くは、崖辺の亭や岩石、遠くは湘江を隔てた村や樹木などが、ありありとその面に映し出されている。どこから持ってこられたのか、いつからあるのかは分からない。これもまた元結が残っていたものであるうか。顔真卿の揮毫とその景勝を争うほどのものではないか。

宋の陳衍が言う「元氏が命名した意図を考えると、川に関係するものとして浯溪とし、山に関係するものとして嵒山とし、屋舎を作って唐亭としたのであるが、この「三吾の名称」は、わたくし元結が自分で始めたものである。新しい文字として、水・山・広をそれぞれ部首として作ったのは、わたくし元結が決めたものである。三者の項目として、すべて「吾」を入れているのは、わたくし元結専用であることを意味しているのだ」と（『大明一統志』に引用）。

崖の前に亭子が有る。下は湘水に臨んでいる。崖の巔には、蓮の花の萼のような、細く小さい石が群がり生えている。その北にもまた亭子があり、今は関羽（伏魔大帝）の像が安置されている。崖の東麓には元結が顔真卿を祭る祠がある。祠は空っぽで狭い。祠の前には三間の屋舎がある。游客が休憩するところだろうが、管理するものがない。

浯溪を越えて東に行くと、北向きの寺があった。中宮寺である。これこそ元結の旧宅址である。とても荒廃していた。過去を追悼する思いにかられた。

その時私は万全ではなかったので、歩いて行くことに躊躇して崖の縁の石の上に体を休めて、舟をしばらくの間待った。残念なことは、磨崖碑の拓本を取るための梯子が撤去されていないのに、拓本取りの者がいないのだった。誠に無念である。

正午になると、舟が来た。

（舟に乗り）また二十里行き、媳婦娘塘を通り過ぎた。湘江の北岸に、あでやかで美しい石が、岩の端に立っている。こうべをあげて西を望んでいる姿のように見える。この下あたりには、竹魚という魚がいる。小さいがとても肥えており、八九ヶ月で一二斤もの重さとなるらしい。他では獲れないものである。

その時、私は病のため船室で横になっており、媳婦とは対面して通り過ぎたのであった。さらに又た十里進み、舟を滴水崖に停泊させたところで、分かった、私が媳婦と対面してこうべをあげて東を望んでいたところからは、川面の靄を通して何度も曲がってきたことを。

滴水崖は湘江の南岸にある。高い山巖が互い違いに空に伸びているところを、湘江が音もなく流れている。荒涼とした村落すらほとんど無い。船頭がなぜこんなところに停泊したのか、分らない。

この日の行程は、すべてで三十五里である。

「三月十一日〜十二日」

《概要》 船旅。十一日はぐずつく天候と、はつきりしない体調とをシンクロさせる。十二日は、なんだかんだであまり進まず。隠者の住まいのような、自然の中にあるまちである冷水灘を、「平穩だな」といい気持ちで眺めていたが、実はこの地は二ヶ月前に流賊の襲撃を受け、殺戮と略奪に見舞われたと聞き、慄然たる思いに駆られる。理想郷のような平和そうな外観の裏には、悲惨な現実が潜んでいたのである。このことを記すの是一文のみだが、霞客の心理状態がよく現れているところであろう。

■本文の部

十一日

平明行、二十五里、過黃楊鋪、其地有巡司。又四十里、泊於七里灘。是日共行六十五里。自入舟來、連日半雨半晴、曾未見皓日當空、與余病體同也。

十二日

平明發舟。二十里、過冷水灘。聚落在江西岸、舟循東岸行。是日天清日麗、前所未有。一舟人俱泊舟東岸、以渡舟過江之西岸、市魚肉諸物。余是時體亦稍蘇、起坐舟尾、望隔江聚落俱在石崖之上。蓋瀕江石骨嶙峋、直插水底、闌闔之址、以石不以土、人從崖級隙拾級以登、眞山水中窟宅也。涯上人言二月間爲流賊殺掠之慘、聞之骨竦。久之、市物者渡江還、舟人泊而待飯、已上午矣。忽南風大作、竟不能前、泊至下午、余病復作。薄暮風稍殺、舟乃行、五里而暮。又乘月五里、泊於區河。是晚再得大汗、寒熱忽去、而心腹間終不快然。夜半忽轉北風、吼震彌甚、已而挾雨益驕。是日共行三十里。

■訳注の部

●訓訳

十一日

平明に行く。

二十五里にして、黄楊鋪を過ぐ。其の地に巡司有り。又た四十里にして、七里灘に泊す。是の日、共に行くこと六十五里なり。

舟に入りてより來、連日半雨半晴にして、曾て未だ皓日の空に當るを見ず。余が病體と同じきなり。

十二日

平明に舟を發す。二十里にして、冷水灘を過ぐ。聚落江の西岸に在り、舟は東岸に循ひ

て行く。

是の日は、天清らかにして日は麗しく、前に未だ有らざる所なり。

一舟人の俱に舟を東岸に泊し、渡舟を以て江の西岸に過ぎり、魚肉の諸物を市ふ。余是の時、體亦た稍く蘇え、起ちて舟尾に坐し、江を隔つるの聚落の俱に石崖の上に在るを望む。蓋し江に瀕して石骨嶙峋として、直ちに水底に挿す。闌闔の址は、石を以てして土を以てせず。人は崖の級隙に従ひて級を拾ひて以て登る。眞に山水中の窟宅なり。

涯上の人に言ふ、二月間、流賊の殺掠の慘となる、と。之を聞きて骨竦む。

之を久しくして、物を市ふ者江を渡りて還る。舟人は泊して飯を待つ。已に上午なり。忽として南風大いに作り、竟に前む能わず。泊すること下午に至り、余の病ひも復た作る。薄暮に風稍く殺ぎ、舟乃ち行く。五里にして暮る。又た月に乗じて、五里にして、區河に泊す。

是の晩、再び大いに汗するを得、寒熱忽ち去る。而して心腹の間は終に快然たらず。

夜半忽ち北風に轉じ、吼震彌々甚し。已にして雨を挾みて益々驕なり。

是の日、共に行くこと三十里なり。

●語注

○黄楊鋪 今の黄陽司。零陵県域、今の冷水灘区域。湘江北岸。「地名湖南」によれば、明の隆慶年間（一五六七―一五七二）に、巡検司の配置が、高溪市からここに移されたという。

○巡司 巡検司、あるいは巡検使。その地域を視察して回る武官。明清時代は、鎮市や要害の地に置かれ、県令が管轄した。

○七里灘 「桂林」図に、七里坪が見える。湘江北岸。地図上を見る限り、今の高溪市の位置に相当する。

○冷水灘 今は冷水灘区で、永州地級市政府が置かれている。

○一舟人 （東岸に停泊している諸々の船の）すべての船頭。

○窟宅 窟穴。ほらあな、転じて隱者の住まい。黄琬は「山水中窟宅」を、山水窟と見なし、景色が優美な場所と訳するが、一般的な景色が優美というよりも、山水自然の中に隱者が住まいを構えている、とした方がよいだろう。

○聞之骨竦 外觀を見て、山水中の窟穴だと賛美していた町だったが、実は流賊による殺戮と略奪を被ったという、悲惨な状況であった。そのギャップに恐れおののく。明末の治安の悪化、世紀末的な惨状が、ここでも垣間見える。

●口語訳

《4》零陵県域を舟航

[十一日]

黎明に出発する。

二十五里で、黄楊鋪を過ぎる。この地には巡検司が置かれている。さらに又た四十里で、七里灘に停泊する。

この日、全行程は六十五里であった。

乗船以来、連日雨降りと晴とが交互に来て、陽光が空に満ちるのを見たことがない。（そ

うした天候のはっきりしない様は)私の病気がぐずぐずと続いているのと同じだ。

〔十二日〕

黎明に船を出発させる。二十里で、冷水灘を通り過ぎようとする。聚落が湘江の西岸にあり、船は東岸に沿って進む。

この日は、空は洗ったように澄み切っており、陽光も麗らかに輝いている。これまでに無い好天だ。

船頭達はみんなして舟を東岸に停泊させ、渡し舟で川の西岸に渡り、魚肉等の物を買に行く。この時、私は体調がすこしばかりよくなったので、起き上がって舟尾に座り、川を隔てた西岸に、石崖の上に聚落があるのを眺めた。思うに、河沿いの場所は、水底から石が突き出すようにして並んでいる。市街の基礎は、土ではなく石である。人々は、その岩の裂け目にできている石段を上り下りしている。まことにすばらしく、山水の中にある隠者の住まいのようだ。

崖の上の地元の人が言う「この二ヶ月前、流賊の殺戮略奪に遇うという惨状だった」と。これを聞いて骨の髄まで竦みあがった。

しばらくすると、物を買に行っていた船頭たちが川を渡って戻ってきた。(しかし)船頭は、(出発することなく)停泊させたまま、食事の用意を待っている。時はすでに午前も遅くである。突然、南風が大いに吹きつけ、そのため前に進む(南に溯江している)ことができなくなった。停泊は午後に及び、そのうちに私の容態もまた悪くなってきた。薄暮に風はようやく収まり、そこで船はやつと進む。五里行くと、日が暮れた。さらに月夜の中を、五里進み、區河に停泊する。

この晩、再び大汗をかき、(そのせいか)寒気も熱も忽ちなくなった。しかし胸と腹のあたりは、とうとう快復というわけにはいかない。

夜半に忽ち北風に変わり、叫ぶような風の音や揺れる波がますます甚しい。まもなく雨混じりとなり、さらに激しさを増した。

この日の行程は、全部で三十里であった。